

第五章

誤解が織りなす密な網

ある陽気のいい午後、モニカが衝撃的な知らせを持ってきた。

「ジャンナはサブリナのこと、友達だと思ってないんだって。ただの同級生として接しているだけだよ」

「え、今、何て言った？ どうしてそんなこと、知ってるの？」

サブリナは相手の自信に満ちて舌を振る様子を見て、根拠のないでっち上げではないと感じ、もとからすでに動揺していた心がさらに激しく揺れ騒いだ。

「それは当然、本人が教えたから」

と言いながら、モニカはことの顛末を雄弁^{てんまつ}（^{ゆうべん}）に話し終わると

サブリナを揶揄^{からか}うように付け加えた。

「でも、正直さ、サブリナもあの子のことあんまり気にしてないでしょ？ たまに一瞬思っけどさ、うちと話すための話題っていうか、うちを喜ばせるためだけに、ジャンナを好きって言ってたように感じる。だってうちはあの子をいい人だとずっと言ってるし」

「え？」

と開いた口が塞^{ふさ}がらないまま、ただ胃の中が荒れ狂い、頭がズンと騒^{さわ}めいた。しかし、相手は軽快^{けいかい}な口調で続けた。

（１） 雄弁 説得力をもって力強く話すこと。

「だったら目的は達成できたよ。うちらは仲良くなったし、ずつと側にいるし」

「騙してたんじゃないよ!」

笑える気分ではなかった。

「まあいいや」

相手は少し気の毒そうに言い、話を切り替えて、

「次の授業、うちと隣で座る?」

と提案した。

「いいよ」

「まあ、うち以外で、隣に座ってくれる人はいないからね」

短い数分間だが、二人の関係は一層深まった。

第五章 誤解が織りなす密な網

その後二つ連続の主要な授業を乗り切り、下校時刻になった頃、サブリナは心身ともに疲れ果てていた。スクールバス停へ向かう途中、道で長く待ち伏せしていたデラニーが飛び出してくて、彼女を掴みカフェに向かいながら腹を割って話をしようと言ってきた。しかし、途中で誰かから電話がかかってくると、その人としばらく話をしてスツと姿を消した。そして、一時間ほど経ってから急用ができたと言いつのメッセージを送ってきた。サブリナは再びすっぱかされたので、今度は何も返信せず、直接ブロックした。

スクールバスはもう出発してしまったので、彼女は倦む体を

引きずりながら電車の駅に向かうしかなかった。緒色しやしよく（この壁を通り過ぎる間に、突然猫の鳴き声が聞こえた。声をする方を見ると、すぐに誰かが止まっている車の後ろに隠れた。その姿はジャンナにそっくりで、心臓がドキッとした。そして、レイラが木陰こかげの下に立っているのが視界に入り、目があつた瞬間、頭の中で状況を思い描いた。

「何をしてるの？」

という問いは力強く、相手を圧倒した。

「あ、あの、私は……」

「一人なの？」

「いいえ、友達と。でもどっか行っただけ」

（2） 緒色 赤土のような黄みをおびた少し暗い赤色。

第五章 誤解が織りなす密な網

それを聞いて、自分の判断は合っていると確信し、軽蔑したように眉を上げて言った。

「その友達は何しに行ったの？」

「あの子は……んー私、わからない」

「じゃ、あの子って誰？友達って誰なの？」

レイラは一連の詰問きつもんに混乱し、相手の怒りはどこから始まったのか理解できないまま怯え、しばらく考えて答えた。

「ウエンディだよ」

サブリナはその濃い瞳をじっと見つめ、真実を窺うかがおうとしたが、結局、鼻で冷笑し、

「そっなの？」

と意味深長に言葉を残してぷいとその場を去った。

第五章 誤解が織りなす密な網

それはある火曜日午後のことだった。ジャンナが慌てて逃げ去る姿を目の当たりにしたのは少女にとって最後の藁^{わら}だった。プライドと道徳感の双方から距離を置くように命じられた。自分はどこで過ちを犯し、一步一步こんな償いのできない状況にされたのか、いくら考えても納得できなかった。あの時のレイラの心細い言い訳は、大^{おお}っぴらな挑発であると感じ、彼女の智力^{ちりよく}を地面に踏み踏み^ふ躍^{にじ}る行為に見えた。しかし、サブリナは知らなかった。それはただの誤解だった。その走っていった人は本当にウエンディで、事態は予想したような深刻なものではない。にもかかわらず、彼女の疑心暗鬼^{ぎしんあんき}③は暴走し、臆測^{おくそく}の道を疾走し、その日の一続き^{ひとつつづ}の出来事と関連性を整理する間もなく、さっさと安易な結論を下してしまった。

その後の数日間、モニカとべったりと過ごし、その感情のことを忘れようとした。二人の離れがたい関係は、他の人から「納豆」という綽名あだなを付けられた。その名の通り、彼女たちの関係は納豆のようなもので、引き離されても糸を引いた。

ただし、無理に気楽なふりをすればするほど、行動は不自然でさくいてき作為的に見えるのだ。彼女はダラダラと日々を過ごしていた。なぜなら、心は諦めきれず、一方で意地を張っているように避けて、最終的に無尽むじんの自己消耗じこしょうもつに陥るしかないのだ。もしもジャンナがすぐ側にいても、彼女は顔を背けそむ、手で顔半分を遮り、誰にもその行動が照れか嫌悪けんおかわからない。プライドの高い彼女にとって、相手の態度を知ってからは、姿勢を低めて好

(3) 疑心暗鬼 ありもしない鬼の姿が見えるように、なんでもないことも怖いと思うこと。

意を示すのが難しかった。道端で拾ったみちばた鳶尾いちばつのように、花卉は少し垂れていても、茎は真っ直ぐに伸びているのである。

ある時、少女の怪しい行動が注意を引き、エイヴリーは近寄って肩を叩き、小声で尋ねた。

「ジャンナと何かあったの？」

すると、サブリーナは何も知らないといった顔で無垢にまばかりをした。

「わかるけど、嫌いだとしても、もうちょっと我慢しようよ」

エイヴリーはそう言って、何事もなかったかのように去った。その時、少女は気づいた。ジャンナの隣に座っているのに、上半身は距離を置くように傾いている。これは無意識の本能だった。彼女はすぐに体を元に戻し、異常がなかったふりをしたが、

隣の女の子はすべてを胸^{むねさんずん}三寸に納めて何も口に出さなかった。

その日の最後の二時間は英語の授業で、先生が休暇を取ったため自習となった。制限のない生徒たちはリラックス気分だ。彼らはお菓子を食べたり、ビデオを見たり、友達とゴシップをしたりしていた。喋り合う声とスマホのスクリーンを触る音が交錯^{こうさく}し、教室は騒がしかった。エイヴリーは微風^{せうふう}のように軽やかに人混みを抜け、サブリーナのそばに立ち、助けを必要としているかどうか気遣った。少女は軽くため息を吐いて、ある物語の叙述^{じょじゆつ}を通して最近の悩みを洩らした。

「ああ、覚えているわ！あの頃、サブリーナはあまり元気がな

かったような顔をして、友達と関係が壊れて、仲直りできないか悩んでいるって言ってたね。あたしに、どうしたらいいか聞いてきたけど、ジャンナとの事とは言わなかった」

一年前の会話だったけれども、エイヴリーは、はっきりと覚えていた。そして、

「でも、あの日、伝えたように、どんな関係でも、コミュニケーションが最も重要だよ。やりたいことがあるならやって、後悔のない青春を過ごさないと」

と続けた。少女は、顔を背け、そむ瞼まぶたの中が潤った。見た目は大胆で無頓着な彼女も、実は繊細で敏感な心を持っているのだ。

第五章 誤解が織りなす密な網

次の朝、旭光きよつこうがウラウラと一階のロビーに降り注ぐ。生徒たちは友達と集まっていた。モニカはサブリナを引っ張ってジャンナの方へ行った。半メートルの距離になったところで、サブリナは力いっぱいその手を振り払った。相手が自分を助けようとしているのは分かっていたが、勇気はなかった。緊張で足がふらつき、蹣跚よろよろめき、転びそうになった。何歩か後ずさりして、壁に手をついてようやく立ち直った。数メートル先で、ジャンナとレイラがトランプをしていた。モニカは仕方なく独りひとで前へ進んで尋ねた。

「うちらも一緒に遊んでいいですか？」

「いえ、二人で十分です」

とレイラが丁寧ていねいに断った。隣で、ジャンナが口を半開きにし

ていたが、声を出さなかった。サブリナは頭を上げ、顔には片笑^{かたえ}みなど一切浮かべず、怒りに満ちた目でレイラを睨^{にら}みつけ、振り返ってその場を後にした。拳^{こぶし}はだんだんと強く握られ、爪が肉に食い込むほどだった。トイレに走り、数枚のティッシュを取り、小さく破いて、捨てる。それをひたすら繰り返していた。「最初からわかっていたのに。レイラって、絶対彼女の代わり^にに断るんだよね」

と「彼女の代わりに」という言葉を強調して、鏡の中を見つめながら自分に話していると、感情がまた高ぶり始めた。その時、モニカがドアを押して入ってきた。サブリナは文句を続けた。

「わざわざレイラたちに尋ねる必要はないわ。ただ自ら辱め^{はずかし}を受けるだけだった」

断られたことは少女にとって恥であった。

「そんなこと、誰も気にしないよ」

と相手の口調は穏やかで、そしてため息をつき、自分の考えを述べた。

「うちから見ると、彼女と仲良くなりたいたいなんて全然思えない。もし本気なら、もっとはっきりと表現してみたら？」

「でも、あの子って、私のこと好きではないでしょう。諦めずに何度も何度も邪魔すると、ただの嫌がらせになるし、迷惑ばかりかけることになっちゃう」

「別に好きではないっていうのは、嫌いってことじゃないし、今は逆にサブリナが嫌っているように見えるよ。逃げ続けても何も解決しないって。せめてあの子に友達になりたいって想い

を感じさせないと」

モニカは火曜日の誤解の出来事を知らなかったので、当然、理解できず、サブリーナを説得しようとした。

「でもレイラが……………」

「ほっというていいよ。彼女の思い通りにしなくていい」

この言葉は少女の心にピツタリとはまり、気分がすっかり晴れた。相手の導きによって、レイラへの不満が頂点に達し、嫉妬に変わって恨みと言っても過言ではない。

翌日の朝は雨だったが、午後には雨が静まり、泥だらけの跡が地面に残った。通り雨が終わり、その後に見れたのは、空に架かる七色の虹である。四月の天気は変化を予測できないと嘆く^{なげ}。

ウエンディは帰り道でスキップし、小さな兔のように陽気だった。いつも口元を綻ほころばせて笑い、周りの人に元気を与えている。サブリナは後ろから彼女に追いつき、羨望せんぼうの眼差まなざしで褒め言葉を投げかけた。

「ウエンディはいいね、誰とでも友達になれると思うでしょう」

声が聞こえて振り返り、それを発した人の方を見ると、なんとなく不思議に思った。そして、頭をポンポンと叩きながら、何かを思い出そうとした。

「なんかあったの？」

と首を傾げ、まばたきを何回かした。少女は何か言おうとしたが、角を曲がった先にジャンナが歩いているのに気づくと、

目が飛び出るほど驚いた。しかし、すぐに表情を整え、わざと足を遅くして前の方と距離を取った。

「あつ、ジャンナだ。一人で寂しそう、挨拶しようか」

ウェンディは言いかけて前に進もうとしたが、隣の少女の怯えている表情を見て言葉を変えた。

「あ、ごめん、知り合いじゃないんだよね。じゃあ、私たち二人だけで話そうね」

少女の心は重たくなった。周りの人から見ると、彼女たちはお互い見知らぬ人同士なんだ。その顔に作り笑いとして浮かぶ苦笑いは、にがうり苦瓜よりも苦かったが、黙り続けた。ウェンディはやつと言いたいことを思い出し、控えめな声で尋ねた。

「でね、レイラと何があったの？」

それを聞いて少女はすぐにレイラが背後で悪口を言ったと確信し、急速に反問した。

「何かあった？ 何もないよ。彼女は何て言ったの？」

声に出る慌てた感じを抑えようとしたが、ウエンディはその中に隠れている窮地^{きゆうち}を機敏^{きびん}に察知^{さつち}し、急いで宥^{なだ}めた。

「怒らないでね。先週の火曜日だったかな。二人の会話を偶然聞いちゃった。本当に本当に、わざと聞こうとしたわけじゃないよ。あの時、サブリナはめっちゃ怒っていたみたいだし、彼女が誰と一緒にいたかもめっちゃ気にしているようだったから」

「ん？」

この答えは少女の予想外だったので、半信半疑で尋ねた。

「もしかして本当にウエンディだったの？ 彼女は本当にウエン

デイと一緒にいたの？」

「そう、私だったよー!」

と爽快そうに答え、短い髪を振り回した。

「でもショートヘアだね。あの子は肩より長い髪だったように見えたんだけど」

「それは演劇の練習をしていたから。私はかつらを着けていたの」

この会話で、少女はその人がウエンディであることをほぼ信じていることができ、最後の疑問を投げかけた。

「ウエンディなら、どうして私を見て逃げるの？」

「逃げてないよ。その時、猫が走ってきたから、猫を追いかけて車の下に潜ったの。それだけ」

「猫を追いかけて潜っただけなら、どうしてその場で出てきて私に説明しなかったの？」

「サブリナの声が大きくて、私はばーっとしちやって。きつとレイラもびっくりしたと思うよ」

少女は再度確認した。

「じゃあ、本当にウエンディだったのね？」

「逆に、誰だと思ってたの？」

今度は、彼女の方が言葉に詰まった。その答えの名前は決して言えなかった。前を見ると、ジャンナは逃げ去ることなく、ただスマホを手にし、ゆっくり歩いている。その距離はわずかなのに、彼女はあえてその一步を踏み出さなかった。

「友達作りって本当に難しいな。その子が周りにいたとしても、

私は話しかけないだろう、多分」

と感慨深げに言った。ウェンディはわけがわからないように首を傾げ、周囲を見渡した。

次の日、エイヴリーは噂^{うわさ}を耳にし、事件の輪郭を掴み、心を込めて助言^{じょげん}した。

「人間関係ではコミュニケーションが一番大事だよ。友達になりたいなら、努力したほうがいい。積極的に行動して拒絶されるかもしれないけど、受動的に待っていても成功しないよ」

この言葉は、ちようとチヨコレートを見つめているサブリナの心に触れた。今、チヨコレートを見ると、それをくれた女の子と空一面に舞う花雨^{かう}の下で交わした約束を思い出す。先週

第五章 誤解が織りなす密な網

の火曜日のことは誤解だったと知って、彼女は近づく機会を探し、もう一度、友情を回復できるかどうか試してみたかった。だから女の子が去る片影を瞥見すると、チヨコレートを何袋か手に取り、素早く追いかけた。しかし、階段を曲がったところでデラニーとぶつかり、相手の求めに応じて、仕方なく一袋を渡した。広い歩道で、足は速やかに前後に動く、一台の止まらぬエンジンのよう。心配と期待に胸を躍らせながら、心の光を懸命に追い求める。突然、路面に出てきた枝に躓き、前へと転びそうになった瞬間、誰かの手に支えられ、大きな怪我を免れた。彼女は膝を地面に擦って止まり、その手を握ったままだった。礼を言おうと口を開こうとすると、

(4) 花雨花びらが雨のように散ること。

「大丈夫？」

と馴染みのある声が上の方から聞こえた。彼女は硬直^{へんちよく}し、一瞬で恥ずかしさに血が一気に顔に上って、頭が真っ白になった。震えながらチヨコレートを差し出し、同時に遊びの誘いを投げかけた。ジャンナはそれを受け取り、驚くことなく嫣然^{えんぜん}（5）と笑った。

「えっと、来週、ゴールデンウィークだし、時間があれば行ける。帰ったら日程確認してみるね」

と答えた。少女はゆっくりと頭を上げ、夢ではないことを確認するために自分をつねった。そして、

「いつまでにわかるの？」

と聞くと、

「今週中におしえるね」

と返事があった。それを聞いて頷き、満足して家に帰った。

翌日の午後、授業中のジャンナは後ろの席に一人で座っていた。顔色は雪のように青白く、目は虚^{うつろ}だった。横顔を壁にもたれかけて、右手をお腹に当て、指の先は白くなっていた。お腹の痛みが襲^{おそ}ってくるたびに、深く息を吸い、そしてゆっくりと吐き出す。先生の声^{こゑ}が耳の側で響き渡り、彼女は全力で授業を聞こうとしたが、腹部^{ふくぶ}の痙攣^{けいれん}が集中を妨^{さまた}げた。しかし、痛がる様子をクラスメートに気付かれることや、多くの人の前で恥をかくことを恐れていた。

(5) 嬌然 美人があでやかにほほえむさま。

「大丈夫ですか？助けになれば……」

声の方を見ると、一箱の痛み止めが渡された。サブリーナが女の子の異常に気づき、さりげなく探りを入れたのだった。

「ありがとう。私は大丈夫、でも………」

声はパツと止まり、女の子は痛みで背中を真っ直ぐにしていられなくなった。女の子がふらふらしながらも微笑みを保とうとしたのを見て、言葉が詰まり、呼吸さえ重く感じた。しかし、痛み止めを渡したその瞬間、二人の視線が重なり合い、無言なのに互いの気持ちを領会した。風が緩やかにカーテンを揺らし、机の上の紙がひらひらと揺れ動く。全てが良い方向へと進んでいるはずなのに、彼女の心はますます不安になるばかりだった。

第五章 誤解が織りなす密な網

『幸運』というのは、小さな穴に落ちる前に少し持ち上げられるだけで、より大きく深い穴に落ちるためのものです。運命の歯車の前では、誰もが死を待たなければならぬ」

これは名作『マウスーアウシュヴィッツを生きのびた父親の物語』の一節であり、サブリーナの心にずっと蟠^{わだかま}りを残しているのだ。